

宮城 社会 3.11大震災

<もう一度会いたい> 恋や部活 次女おうか

◎ (6) 突然奪われた幸せ

社交的なお姉ちゃんとは好対照で妹は引っ込み思案だった。

宮城県石巻市の今野浩行さん(53)と妻ひとみさん(45)の次女理加さんはいつも姉の背中に隠れ、もじもじしていた。

授業でも、答えが分かっても手を挙げない。保護者参観でひとみさんはじれったい思いをしていた。

「学校でいじめに遭っても自分で抱え込み、親や先生に打ち明けられないかも」
おとなしい娘を心配し、「何かあったらすぐ言うんだよ」と諭していた。

<夢は栄養士>

活発な姉への憧れがあったのだろう。中3の文化祭で副実行委員長を務め、全校生の前であいさつした。

少しでも変わろうとしている。

親の目にはそう映った。

きちょうめんだった。字は丁寧。数学のノートは図形が定規とコンパスを使って書かれている。そのまま印刷して学習書として出せるぐらいだ。

部屋もきれい。整理整頓が行き届いている。四つ下の弟が散らかしてしょっちゅうけんかしていた。

交友の広さはお姉ちゃんにかなわなかったが、恋は先を越した。

高校生になったら急にオムレツを焼き始めた。料理には興味がなく、炊事も親任せだったのに。

父の浩行さんが「どういう風の吹き回し？」と首をかき上げていたら、調理師を目指す同級生のボーイフレンドができていた。

居酒屋の息子さんで将来の跡取りだという。

先方も親公認で、字が上手なのを買われてお店の品書きの代書を手伝っていた。

なりたい職業が「銀行員」から「管理栄養士」に変わったのもこのころ。

<彼にケーキ>

震災1年前の2月14日の前夜。

職場の浩行さんの携帯電話が鳴った。理加さんからだ。夜の9時を回っている。

「仕事で疲れているところごめん。帰ったらスーパーまで乗せてって」

聞いたら、チョコレートケーキを焼いてしくじったという。

母には「かえって手作り感が出ていいんじゃない」とフォローされたが、きちょうめん女子は妥協を許さない。材料を買い直して再挑戦したいという。

娘にそんな感じでせがまれたらおやじも悪い気がしない。家に急行し、2人で車で買いに出た。

当日。

前の晩の悪戦苦闘をおくびにも出さず、理加さんは涼しい顔で彼に渾身(こんしん)の一作をプレゼントした。

高校に進んで一皮むけたと親は感じていた。

プライベートは充実し、スクールライフも吹奏楽の部活動で楽しんでいる。

母のひとみさんは理加さんが何げなく口にした一言を覚えていた。

「こんなに幸せでいいのかなあ」

夢心地に浸っていた。

その数日後、津波にさらわれ、16歳で命を落とす。

無念と思う時間さえ与えられなかった。



理加さんの高校時代のノート。きちょうめんな性格が出ている

拡大写真



今野理加さん

拡大写真

